



明日に吹く風

第18号



今年最後の月になりました。12月8日はジョン・レノンの、9日は夏目漱石の命日です。そんな12月には登校中にビートルズやジョン・レノンを聴いて、寝る前には夏目漱石の本を読むのもいいのではないのでしょうか。個人的にはジョン・レノンなら『(just like) starting over』。夏目漱石なら『夢十夜』がおすすめです。

「映画になった原作本」の特集

一階閲覧室短期特設として「映画になった原作本」の特集をやっています。『ティファニーで朝食を』に代表されるように、映画と原作本の内容が全く違うというものも少なくありません。そういった作品を探して読んでみるのも、一つの読書としておもしろいと思います。ぜひ、今回の特集を利用してそういった作品を見つけてみてください。

図書館サポーターズ推薦図書*

「ダレン・シャン」 darren shan 著 橋本恵 訳

友達をたすけるために、半分だけ人間を捨てる・半分だけバンパイアにならなければならない場合、みなさんならばどうしますか？

選択をせまられた主人公ダレンのきっかけはたった一枚のサーカスのチラシ。このサーカスのチラシがダレンの人生の歯車を大きく狂わします。

登場するキャラクターもバンパイアだけでなく、蜘蛛や蛇少年、狼男などユニークで不思議な生き物たちばかりです。

時折添えられる挿絵もとてもリアルで、本の中の世界へ導いてくれます。

読み手の想像を裏切る奇想天外のストーリーとその表現力。読む機会があれば是非読んでみてください。(S.E)

「レキシントンの幽霊」村上春樹 著 913.6/Mu43

この短編集の一つの『トニー滝谷』が2004年に市川準監督により映像化されました。第57回口カルノ国際映画祭でコンペ部門審査員特別賞などを受賞。

収録作品は『レキシントンの幽霊』『ミドリノ獣』『沈黙』『氷男』『トニー滝谷』『七番目の男』『めくらやなぎと、眠る女』の七作品です。

ほかの短編集とくらべて全体のテーマがわかりやすいと思います。でもそのテーマは明確にある、というわけではありません。一つのアイデアを、うどんをこねて引き延ばすよう仕立てたテーマがそこにはあります。読む人によって違うとは思いますが、僕は

「不安感」「喪失感」とかいったものを感じとりました。

村上春樹の小説の特徴として、またすぐれた点として文章のリズムの良さがあると思います。確かに内容は抽象的なものが多くわかりにくいところもあります。でも、最近でいえば『1Q84』でもわかるとおり、良い意味でも悪い意味でも多くの人が村上春樹の小説を読んでしまう。それは、文章のリズムが他の作家と比べて独特であり、音楽という「聴き入る」みたいに「読み入って」しまうというのもあると思います。そういった「内容」ではない部分にも注目して読んでみると、今までとは違った感想をもつことができると思います。そのきっかけとして『レキシントンの幽霊』を読んでみてはいかがでしょうか。(Y・S)

「悲しみよ今日わ」 フランソワーズ・サガン 著

仏文と聞くと、何だか敷居を高く感じるかもしれませんが、非常に読みやすい表現と文章をとっています。舞台は太陽と海がきらめく夏のパリ。セシルたちは林の奥の白い別荘へ、バカンスを過ごしにやってきます。やがて感受性の強いセシルは青年シリルと出会い、その父であるレイモンは本当の愛を求めるとおとなの女性、アンヌと恋に落ちます。そこにレイモンの愛人エルザも加わり、スリリングな愛の五重奏は誰も想像のつかない結末を迎えます。理性ではどうしようもない恋の感情の強さと、その感情にとらわれてしまう人間の弱さ、哀しさが息苦しいほど伝わってくる名著です。恋愛を含めた人間関係の中で、まるで自分の人格が二つに分離し、自分が自分でない様に感じた経験のある方。人の優しさや美しい心遣いに打たれ、後悔した経験のある方。主人公のセシルも物語の中でそのような経験をします。

仏文壇の寵児と謳われた著者が動かす 17 歳の女の子と自分を照らし合わせるのも面白いかもしれません。(T・U)

「翻訳夜話」 村上春樹 柴田元幸 著 801.7/Mu43

小説家として有名な村上春樹は、実は翻訳家としても精力的に活動しています。公開対談の場は、大学、翻訳学校、若手翻訳家を交えて、とその場所を変えながらも、二人の本質である「翻訳することが楽しくてしょうがない」想いが、言葉の端々からヒシヒシとつたわってきます。なかでも競訳は、とても価値のある試みだったと思います。レイモンド・カーヴァーの翻訳の際は、カーヴァーの翻訳を全編にわたってしている村上春樹の日本語のほうが長文となり、いっぽうポール・オースターの翻訳の場合はポール・オースターの翻訳を多く手掛ける柴田氏の日本語のほうが長くなった。このあたりは、両者の各原著者に対する思い込みがそうさせているのだろうかに興味深かったです。(Y.S)

「いま、会いにゆきます」 市川拓司 著 913.6/I14

この本は、5年前に映画化やドラマ化されて有名になったものの原作です。この本は、6月の梅雨の時期だけに死んだ母親にそっくりの人が戻ってくるという話。しかし、その人は記憶喪失で子どものことや夫のことなどまったく分かりません。しかし、一緒に生活していき、もう一度記憶を積み重ねていき、もう一度恋をしたり、やっと息子にも会えたのに、無常にも梅雨明けが訪れてしまうという、切ない話です。リアルの中にもファンタジーがあり日本の四季を取り入れた、独特の本になっています。とっても読みやすいので、ぜひ読んでみてください。(N.O)